



雲は空で生まれ、巡り巡って森の大地に降り込み
 大気を流れる風は、森に息を吹き込み、そこで眠る
 大地と空とを結ぶ森は、酸素と水の天然貯蔵庫
 夜明けの光とともに、地中の空気と水を空に還す
 光合成は命の源、地球生命史36億年の絶えることのない証し
 雲を耕して、宇宙の原理を感知する

照葉樹林の森

NPO法人 雲を耕す会 事務局長 池谷 裕

国の雲南を通じて、長江流域、さらに西南日本まで広大な森の帯となつて広がっていた。アジアの温暖多雨地域と致する。

照葉樹林地帯は驚く

ほど共通の文化を持つ。納豆・なれ鮭・豆腐・コンニャク・酒・味噌・故郷の味と言われるほとんどは食文化が、照葉樹林に源を発しているのではないかと。遠州の山間地で木の実やソバの食文化が発達していることに思いが行く。

食べ物だけでなく、羽衣サルカニ合戦・花咲爺などの昔話、さらに鵜飼いがそうである。絹織物・草木染め・紙漉き・漆等の伝統工芸も照葉樹林から生まれた。日本の文化の古層に照葉樹林文化が深く刻み込まれていたためである。山菜・茶・蜜柑・養蚕の源流も雲南である。漆器もろくろを使う技術とともに伝わってきた。

照葉樹林文化は稲作文化の伝わる前からあった。その最たる特色は焼畑である。緑濃い森林を、焼畑によって切り開いて、アワ・ヒエーンバ等の雑穀、里芋や山芋等の芋類を生産していた。トチ、ドングリの灰汁抜きも焼畑文化で

ある。ワラビ、ゼンマイ等も灰汁を抜く。

遠州でも昭和30年代まで焼畑が行われていた。夕焼けの山の斜面に白煙が立ちのぼり、赤い炎がチラチラと見えた。山に火入れをするときは、山火事がこわい。秋葉信仰は焼畑の火防と結びついていった。昔から火は畏れ多い存在であった。そう言えば、神に供える榊も、仏様に供えるシキミも照葉樹であった。焼畑地域ではヤマンカミを奉る。

やがて米を麹で発酵して酒を造る技術が生れる。納豆・味噌・なれ鮭・漬物と発酵食品が多く見られるのも特色になっている。遠州の浜納豆もそのひとつである。

春と秋の月のきれいな夜に、若い男女が集まってきて歌の掛け合いをする。愛情を交換するこの習俗は、万葉の時代に歌垣と呼ばれていた。照葉樹林帯では今も見られる。例えば、雲南を中心にして、西はヒマラヤのふもとから、延々と6000kmもの距離を照葉樹林文化は旅してきたのである。ネパール・ブータン・西双版纳の少数民族の人たちが語ってくれた生活のひとこまひとこまに、遠州の昔が蘇る。



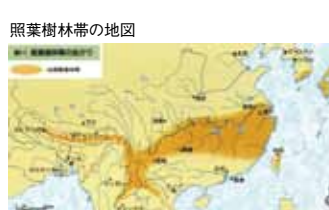
とちもち



ブータンの子どもたち



焼畑



照葉樹林帯の地図

『照葉樹林文化と日本』 くもん出版より